

II 遺 跡

1. 遺跡の概観

今回の調査地は、平城京廃絶以降田地となったと考えられる地区で、地形は北西から東南にゆるやかに傾斜する平坦地である。奈良時代の遺構は、主に地表下約40～60cmのところに堆積する地山面（東南部は暗灰褐砂質土、他は暗黄灰粘土）で検出した。この間は耕土・床土の下に厚さ20cm内外の遺物包含層（灰褐砂質土）が堆積する。遺構検出面の一部に奈良時代の整地土と思われる黄灰粘質土が薄く残存していたものの、柱掘形の深さや溝等の遺存状況からみて、全体的に後世の削平をうけたと判断される。

しかし、遺構の保存状態は極めて良好で、多数の柱掘形、土壇、溝、井戸等が検出され、これらを検討した結果、十六坪は奈良時代初頭から平安時代初期にかけて宅地として利用されたことが明らかとなった。

この坪は、奈良時代の中頃を境に前後で宅地割（坪割）が変わり、また井戸の時期から考えて、前半期、後半期とも大きく2時期に区分することができる。

奈良時代前半期は、十六坪は道路状遺構 S F 0529 によって南北に二分される。この道路は、坪の推定中心線上に位置するため宅地割の施設と判断される。二条の側溝（S D 0525、0530）から出土した土器の年代は、ともに奈良時代中頃であるため、ほぼ同時に廃絶したものと思われる。したがって、それ以降には少なくとも坪の西半は一体とした利用されたことがうかがえる。

出土遺物は、多岐にわたる。とりわけ土器類の出土量が多く、また器種が豊富でしかも完形品に近いものもかなりあるのが特徴である。そのなかで人名等を記した墨書土器が二点出土したことは、注目に値する。

2. 遺 跡

検出した遺構で、現在まで明らかとなった主要遺構に、掘立柱建物28棟、堀5条、溝数条、井戸2基、土壇などがある。整理上遺構に一連番号を付し、その前に S A（堀等）、S B（建物）、S D（溝）、S E（井戸）、S F（道路）、S K（土壇）の記号をつけた。以下に順次解説する。なお、（ ）内の寸法は天平尺に換算した値である。

S B 0521 発掘区東南隅に位置する掘立柱東西棟建物。東半は発掘区外になる。桁行1間以上（8尺）、梁行2間（6尺等間）で、東西溝 S D 0525 廃絶後に建つ。

S B 0522 発掘区東南隅に位置する掘立柱南北棟建物。東側柱列は発掘区外になる。桁行

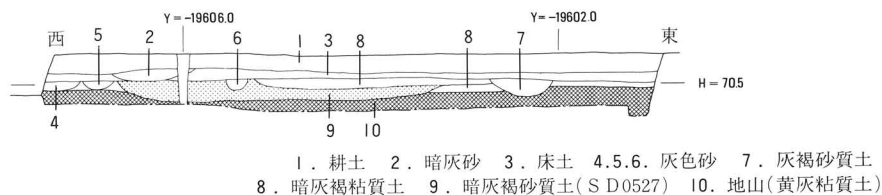


fig. 6 発掘区北壁東部土層図

井戸廃絶時期は、奈良時代中頃と考えられる。

S A 0544 井戸 S E 0540 の北側にある掘立柱東西塀で、3 間分(6 尺等間)を検出。柱筋は、東で北にやや振れる。S E 0540 の目隠塀と考えられる。

S B 0545(PL.5) 発掘区東北部にかかる南廂付の掘立柱東西棟建物。桁行 3 間以上(6 尺等間)、梁行 2 間(6 尺 5 寸等間)、廂 1 間(6 尺 5 寸)で全体的に柱間は狭い。身舎柱の柱掘形は、一辺 60cm ほどの隅丸方形状で、深さ約 40cm と浅い。

S B 0550 発掘区中央南寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行 4 間(7 尺 5 寸平均)、梁行 2 間(8 尺等間)で、柱掘形はやや小さい。棟方向は北で東へやや振れており、時期は降と思われる。なお、西南隅柱掘形から鉄釘が出土。

S B 0555 S B 0550 の東どなりにある掘立柱南北棟建物。桁行 3 間(7 尺等間)、梁行 2 間(6 尺等間)。東側柱北端間の柱掘形は中世の南北溝によって壊される。南妻柱筋の柱掘形は、東西溝 S D 0530 や南北溝状遺構 S D 0527 の廃絶後に掘られる。

S D 0560 発掘区中央東寄りにある素掘りの南北溝。幅約 40cm、深さ 10cm ほど。南北棟 S B 0580 の東雨落溝を兼ね、南端は中世溝に壊わされるが坪内小路 S F 0529 の北側溝 S D 0530 に注ぐと考えられる。南北棟 S B 0590 の廃絶後に掘られる。

S B 0561 S D 0560 の南端にある掘立柱東西棟建物。桁行 3 間(6 尺等間)で、両妻柱は検出しなかったが、梁行 2 間(5.5 尺等間)と考えられる。柱掘形は全体的に小さい。道路状遺構 S F 0529 廃絶後に建てられる。

S B 0565(PL.5) 発掘区中央にある掘立柱南北棟建物。桁行 3 間(6 尺平均)、梁行 2 間(南妻柱筋 6 尺等間、北妻柱筋 6.5 尺等間)で南から 1 間目に間仕切がある。全体にやや歪んだ平面になるが、柱掘形の重複や配置からみてこの付近に建つ建物のなかで時期は最も古いと思われる。

S B 0570(PL.6) 発掘区中央にある掘立柱建物で総柱になる。東西 2 間(6 尺等間)、南北 2 間(8 尺等間)で南北にやや長い平面をもつ。柱掘形は一辺 60cm ほどの隅丸方形になり、深さは約 40cm。西側柱は、井戸 S E 0600 の掘形によって壊される。小規模な倉庫風の建物と思われる。西北隅柱掘形から土馬が出土した。

S A 0576 発掘区東北にある南北塀。3 間分(6.5 尺平均)検出。

S B 0580(PL.6) 発掘区中央北端に位置する掘立柱南北棟建物。桁行 3 間(9 尺等間)、梁行 2 間(8 尺等間)となる。ただし、北妻柱の掘形はやや小さく、西へ片寄るので間仕切

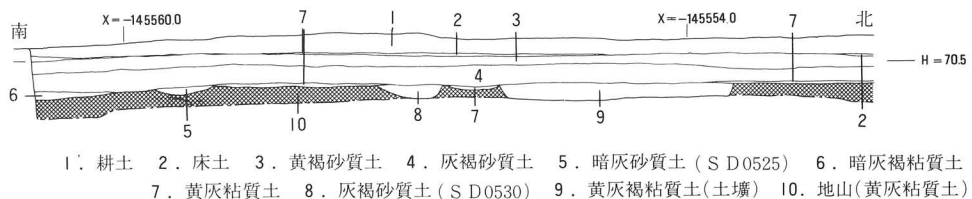


fig. 9 発掘区西壁南部土層図

柱の可能性もある。柱掘形は一辺70cm前後の隅丸方形で、深さ50cmほど。なお、東北隅柱掘形を切る土壌状の小穴(S K0710)から、6131A型式の軒丸瓦が出土した。

S B0584 発掘区北東端に建つ南北柱列。3間分(6尺等間)検出。建物となる可能性がある。柱掘形の重複からS B0545より時期は新しい。

S A0585 S B0584の西側に位置する南北塀。3間分(5.5間尺等間)検出。

S B0590 発掘区東北寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行3間(5.5尺等間)、梁行2間(7尺等間)で、柱掘形は、径40cm前後の円形状になる小規模な建物。柱掘形の重複から、S B0580及びS D0560より時期は古い。

S K0594, 0595 発掘区東北隅にある径1mほどの円形状の土壌状掘形で、3mの間隔で東西に並ぶ。深さはS K0594が50cm、S K0595が90cmあり、柱掘形の可能性も残る。

S E0600A(PL.9) 井戸S E0600Bの掘形に切られる一辺2m、深さ90cmほどの大型の方形土壌。埋土は黄茶褐色砂質土で均質的に堆積しており、また遺物の出土は極めて少ない。井戸S E0600Bより一時期前の井戸掘形の可能性が強いので、これをS E0600Aとした。

S E0600B(PL.9) 発掘区中央に位置する井戸。掘形は、長径3.5m、短径3mの長円状になり、遺構検出面から80cmほど全体を掘ったところで北半部のみ更に2.2mほど掘り下げて井戸枠を据え付ける。井戸枠は、内径東西約80cm、南北約60cmの矩形になり、下端か

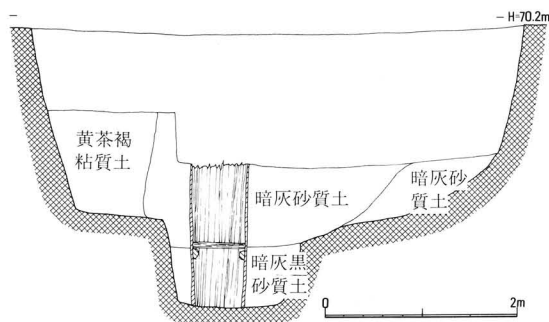


fig. 10 SE0600断面実測図

ら1.5mほどが残存する。枠板は、扉板を転用したものと思われ、厚さ5cmの1枚板で各面を囲い、内側中程に角材(南北)及び半丸太材(東西)を井桁状に渡す。しかし、各部材に仕口穴等はなく極めて簡単な構造になる。井戸掘形から出土した遺物の年代から奈良時代後半に構築され、奈良時代末期に廃絶したと考えられる。

S B0610 井戸S E0600西南に建つ掘立柱建物。総柱。東西2間(8尺等間)、南北2間(6尺等間)で東西に長い平面になる。柱掘形は一辺40cm前後と規模が小さい。柱掘形の重複からみて、S B0640より時期は古い。

S B0615 井戸S E0600の北にある掘立柱東西棟建物。桁行3間(7尺平均)、梁行2間(6尺平均)。西北隅柱掘形は、土壌S K0625の底から検出したので、時期はこれより古い。

S B0620 井戸S E0600の東端にある掘立柱建物。西北部はS E0600の掘形で壊されるが、東西2間(6尺等間)、南北2間(8尺等間)と南北に長い平面になり、またS B0570と規模が同一であるので、総柱の可能性がある。全体の配置から考えて、この建物の方が古く、S B0570は建て替えと考えたい。

S K0625(PL.8) 発掘区北西にある東西方向に長い溝状の大土壇。幅2.5 m、長さ6 m、深さ15~20cmある。奈良時代中頃に属する土器類が多量に出土した。

S B0630 発掘区北端中央にある柱列。2間分(6.5尺等間)検出。柱掘形は約30cmと小柄であるが、南北棟建物の南妻柱列にあたる可能性が強い。柱掘形の重複からS B0580より時期は新しい。

S B0635 発掘区南端西寄りにある2列の東西柱列。各3間分(6.5尺等間)検出。柱掘形は50cmほどで小さいが、柱筋は揃う。柱列の間隔は4.2 m(14尺)ある。妻柱を検出していないが、梁行2間(7尺等間)の東西棟建物に復原できる。柱掘形の検出状況からみて時期は降と思われる。

S B0640(PL.7) 井戸S E0600の西南にある掘立柱建物。総柱になる。東西2間(6尺等間)、南北2間(7尺等間)で、建物規模に比べて柱掘形は一辺60cmほどと大きく、倉庫風の建物であろう。建物の方位は、北で東へ振れており時期は降と思われる。

S A0645 発掘区中央北寄りにある柱列。5間分検出。柱間は2 m前後でやや不揃い。柱筋は東に振れる。性格は不明。

S B0650 S B0615とほぼ同一に建つ掘立柱東西棟建物。桁行3間(6.5尺前後)、梁行2間(7尺等間)。柱掘形は径30cmほどで小さい。S K0625と重複するが、時期はこれより古い。

S B0655 S B0650の北に位置する小規模な掘立柱東西棟建物。桁行3間(5尺等間)、梁行2間(4尺等間)で、柱掘形は20cm前後と小さい。S K0625と重複するが、時期はこれより古く、また全体の配置から考えて、S B0650より新しい。

S B0660 発掘区西端南半に並ぶ柱列。4間分(7尺等間)検出。柱掘形は、30cm前後と小さいが、整然と並んでおり南北棟の東側柱列の可能性が強い。

S K0665 発掘区西南にある不整形大土壇。深さ20cm前後。東端は、S B0640の柱掘形にかかる。土器類が多量に出土した。

S B0672 発掘区西寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行3間(7尺余り)、梁行2間(6尺5寸等間)で南半に間仕切柱が建つ。北妻柱掘形から瓦器(13世紀)が出土した。

S B0675 発掘区西端中央に位置する掘立柱南北棟建物。東西2間(7尺等間)、南北2間(10尺平均)と変則的な平面になる。柱掘形の一部が奈良時代後半に掘られた土壇等やS B0640の柱掘形で壊されており、時期は古いと思われる。

S B0678 発掘区中央西寄りにある掘立柱南北棟建物。桁行4間(6尺5寸平均)、梁行2間(8尺等間)。東側柱は、中世溝等によって壊されたため、遺存状況は良好と言えない。北妻柱掘形は、S B0615と重複するが、時期はこの建物の方が新しい。

S B0680 発掘区西端中央にある掘立柱東西棟建物。西半部は発掘区外へ出る。桁行2間以上(8尺等間)で東妻柱は検出なかったが、梁行2間(7尺等間)と考えられる。棟方向は東でやや南に振れる。遺存状況は良くない。柱掘形は一辺60cm以上で比較的整然とする。S B0675と重複するが、時期はこの建物が新しい。

S K 0685 S B 0680内にある不整形の大型土壇で、時期は、出土遺物の年代から奈良時代後半と思われる。

S B 0690 発掘区北西にある掘立柱建物。遺存状況は良くないが、桁行 2 間以上(4.5 尺前後)、梁行 2 間(5 尺前後)の東西棟建物に復原できる。柱間に比べて柱掘形は大きい。棟方向は、東でやや南に振れる。

S K 0692, 0693, 0702, 0704 いずれも発掘区北西に分布する土壇で、深さは10～20cmほどと浅く、不整形である。奈良時代後半に属する土器類がかなり出土した。

S B 0700(PL. 7) 発掘区北西隅に位置する掘立柱南北棟建物。桁行 2 間以上(6.5 尺等間)、梁行 2 間(6.5 尺等間) になり、北半は発掘区外に出る。南妻柱列は、いずれも土壇 S K 0625 の底から検出されており、時期は古い。

S D 0716, 0720 一条大路確認のため調査地区北寄りに設けたトレンチで検出した素掘りの中世溝。幅30cm、深さ10cmほどで、一条大路推定位置より南にあることが判明した。ともにほぼ東西の直線上に位置しており、同一溝の可能性もある。

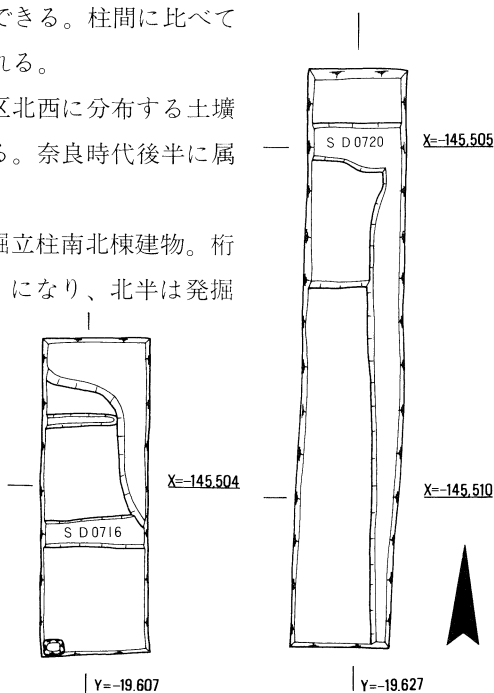


fig. 11 西北及び東北トレンチ遺構図

時期	遺構番号	規 模		棟方向	備 考	時期	遺構番号	規 模		棟方向	備 考
		桁 行 (尺)	梁 行 (尺)					桁 行 (尺)	梁 行 (尺)		
A	S B 0545	3 以上 (6)	2 (6.5)	東西	南廂(6.5)	C-1	S B 0615	3 (7)	2 (6)	東西	
	S B 0565	3 (6)	2 (南6 北6.5)	南北	間仕切有		S B 0660	4 (7)	——	南北	
	S B 0650	3 (6.5)	2 (7)	東西		C-2	S B 0521	1 以上 (8)	2 (6)	東西	
	S B 0675	2 (10)	2 (7)	南北			S B 0561	3 (6)	2 ? (5.5)	東西	
	S B 0700	2以上(6.5)	2 (6.5)	南北			S B 0630	——	2 (6.5)	南北	
B-1	S B 0590	3 (5.5)	2 (7)	南北	総柱 ?		S B 0630	2 以上 (7)	2 (7)	南北	
	S B 0620	2 (8)	2 (6)	南北		S B 0640	2 (7)	2 (6)	南北	総柱	
	S B 0655	3 (5)	2 (4)	東西		D	S B 0555	3 (7)	2 (6)	南北	
	S B 0690	2以上(4.5)	2 (5)	東西			S B 0584	3 (6)	——	南北	
B-2	S B 0570	2 (8)	2 (6)	南北	総柱	S B 0635	3 (6.5)	2 ? (7)	東西		
	S B 0580	3 ? (9)	2 (8)	南北	北へ延びる ?	S B 0678	4 (6.5)	2 (8)	南北		
C-1	S B 0522	3 (3.5)	1 以上 (3)	南北	仮設的	平安以降	S B 0550	4 (7.5)	2 (8)	南北	
	S B 0539	4以上(7.5)	2 (6.5)	東西			S B 0680	2 以上 (8)	2 (7)	東西	
	S B 0610	2 (8)	2 (6)	東西	総柱		S B 0672	3 (7)	2 (6.5)	南北	中世

tab. 3 主要建物一覧表

3. 十六坪周囲の条坊復原

平城京右京二条二坊十六坪は、北に一条大路、西に西二坊大路に面し、南と東をそれぞれ十五坪、九坪との坪境小路に面している。今回の調査区が十六坪内に占める位置を明らかにするには、まずこれらの条坊道路の交点の推定復原座標を求めることが必要である。

本調査区の近隣地点で平城京の条坊に関連する遺構を確認しているのは、玉手門(15次調査)、右京一条一坊四坪における西一坊大路両側溝(103-14次調査)、右京二条三坊十一、十五坪における二条条間大路両側溝及び坊間小路東側溝(123-17次調査)などがある。

これらの位置及び実測値はfig.12、tab.

4のとおりである。このうち、103-14次調査で得た西一坊大路両側溝心から

西一坊大路心を算出すると、 $X = -145,394.829$ 、 $Y = -19,119.959$ となる。また同調査によれば、西一坊大路東側溝は国土方眼方位に対して北で西 $0^{\circ}20'03''$ 振れており、朱雀大路が同じく北で西に $0^{\circ}15'41''$ (平城京朱雀大路発掘調査報告書 奈良市 1974)振れているのに比較するとやや大きいことがわかる。側溝の振れを大路の振れと同一とは即断し難いが、今、西一坊大路以西の南北条坊を北で西に $0^{\circ}20'03''$ 振れているものと仮定し



fig. 12 発掘条坊位置図

	地 点 名	X	Y	調査次数
1	平城宮玉手門心	-145,753.540	-19,093.260	15次
2	西一坊大路西側溝心	-145,395.156	-19,131.783	103-14
3	西一坊大路東側溝心	-145,394.502	-19,108.135	"
4	西一坊大路東側溝心	-145,443.702	-19,107.848	"
5	二条条間大路北側溝心	-145,747.107	-20,082.222	123-17
6	二条条間大路南側溝心	-145,770.635	-20,042.112	"
7	右京二条三坊坊間小路東側溝心	-145,777.204	-20,051.846	"

tab. 4 発掘条坊座標表

	X	Y
A	-145,490.212	-19,652.212
B	-145,623.410	-19,651.435
C	-145,622.677	-19,518.237
D	-145,489.479	-19,519.014

tab. 5 十六坪復原座標表

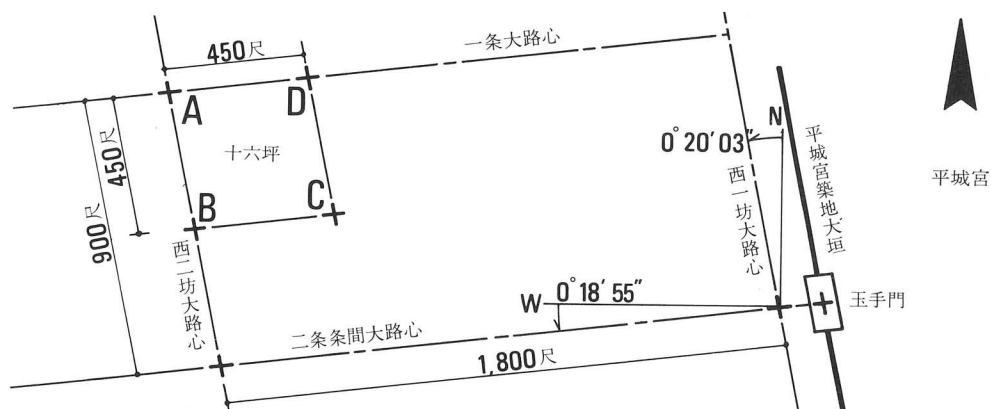


fig. 13 十六坪条坊推定復原概念図

て、103-14次調査で得た西一坊大路心から、玉手門前における二条条間大路と西一坊大路との交点の推定復原座標と求めると、 $X = -145,753.675$ 、 $Y = -19,117.866$ となる。

また、123-17次調査の成果によれば、二条条間大路(復原幅80尺)は国土方眼方位に対し西で南に $0^{\circ}18'55''$ の振れをもつことが判明しており、これを西一坊大路以西の東西条坊の振れと仮定することが可能である。

この南北方向、東西方向の条坊の振れを考慮して、先に求めた玉手門前における二条条間大路と西一坊大路との交点の推定復原座標と、玉手門心との距離を計算すると24.606mとなり、大路心から平城宮築地大垣心までの計画尺(80尺)に近い値を得る。

したがって、南北条坊が国土方眼方位に対して北で西に $0^{\circ}20'03''$ 、東西条坊が西で南に $0^{\circ}18'55''$ の振れを持つものと仮定し、小路心々間計画尺450尺として、十六坪をめぐる条坊の交点の推定復原座標を試算した。なお、これまでの調査で判明している計画単位尺は場所によって1尺あたり0.294~0.296mと定まらないが、123-17次調査では条坊の計画単位尺が0.296mに近似することが判明しており、今回の試算でもこの数値を採用することとした。結果はtab.5のとおりである。

4. 占 地

十六坪を囲む条坊路の交点の推定復原座標をもとに、今回調査地区の位置を復原すると、fig.14に示すように十六坪の中央西寄りにあたることになる。そこで検出した道路状遺構 S F 0529の位置を考えてみたい。まず、一条大路心と十五・十六坪の坪境小路心との距離450尺を二等分する線は、東西溝 S D 0530上に位置する。また、一条大路計画幅を80尺、十五・十六坪の坪境大路計画幅を20尺と考えると、坪の南北長は400尺となる。この二等分線は、東西溝 S D 0525に位置する。

このことから、二条の東西溝 S D 0525、0530によって画される道路状遺構 S F 0529は、十六坪を南北に二分する位置にすることがわかる。S F 0529は、平城京造営当初から構築されており、十六坪の宅地割の施設であると判断される。

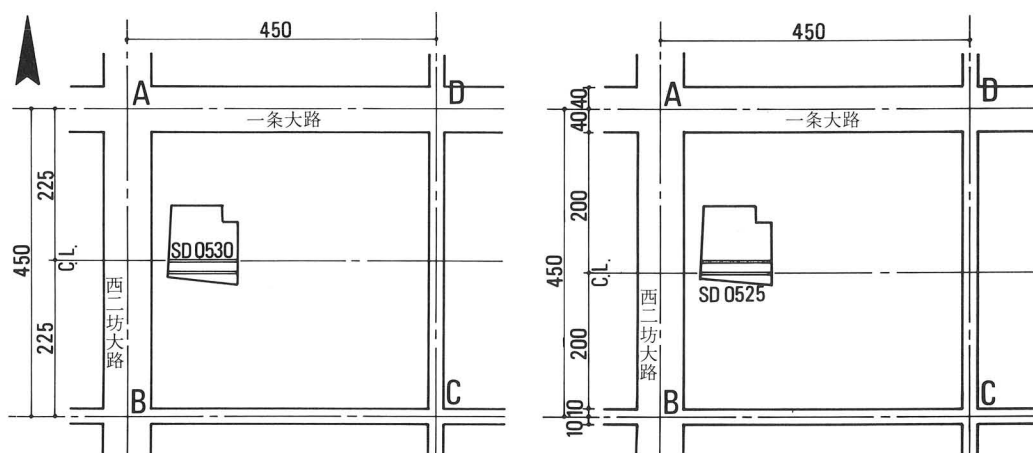


fig. 14 十六坪占地概念図

5. 時期区分

調査地区は、十六坪の西辺部に位置し、坪の約 $\frac{1}{4}$ にあたる。検出遺構を検討した結果、調査地は宅地として利用されたものと思われる。奈良時代の敷地利用は、坪内に貫通する小路 S F 0529 が京造営当初から存在し、奈良時代の後半に至り廃絶したと考えられることから大きく 2 時期に大別でき、更に建物や井戸等の遺構の重複関係や配置状況から検討すると、全体として古い順に A, B_{1,2}, C_{1,2}, D の 4 期に区分することができた。

A 期（奈良時代初頭） 十六坪は、坪内東西小路 S F 0529 によって南北に二分される。南廂付東西棟 S B 0545 は、北半坪の中央やや西南寄りに位置する。柱間寸法は、桁行 6 尺、梁行及び廂の出が 6 尺 5 寸と小さいが、この区画における主要建物であり、西南に建つ南北棟建物 S B 0565 とともに居住区画を形成すると思われる。

他の 3 棟は、いずれも付属的施設と考えられる小規模な建物で、その配置に計画性は特にみられない。

B 期（奈良時代前半～中頃） 宅地割は、A 期を踏襲すると思われる。発掘区東端に井戸 S E 0540 が掘られ、これを中心とする付属的施設が建ち並ぶ。この時期は、建物の一部に建て替えがあり、B₁, B₂ の 2 期に細分できる。

B₁ 期は、倉庫風の建物 S B 0620 をはじめ、小規模な建物が建ち並ぶ。各建物の柱間は 5～6 尺が主で規模も小さく、また柱筋もやや雑然となり、雑舎を想起させる。発掘区東端の井戸 S E 0540 を中心とする付属的施設が建つ区画として利用されたものと思われる。

B₂ 期は、B₁ 期の雑舎等を建て替え整備したと考えられる時期である。即ち S B 0590 は S B 0680 に、S B 0620 は S B 0665 に建て替わる。また、これらの建物の東側に S B 0680 の雨落溝を兼ねる水路 S D 0560 が掘られる。調査範囲内では西半部に建物はなく、土壌が掘られたようである。

井戸 S E 0540 は存続するので、敷地利用形態は基本的に B₁ 期を踏襲したと思われる。

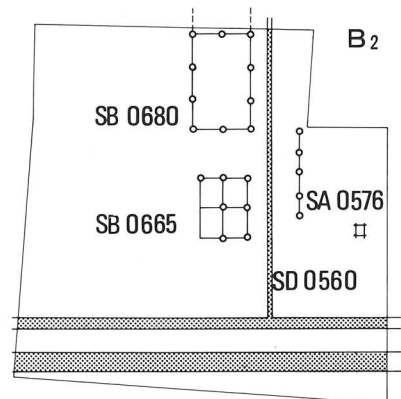
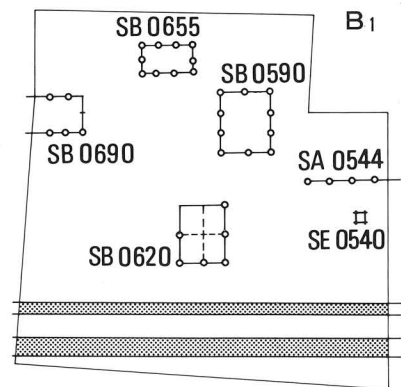
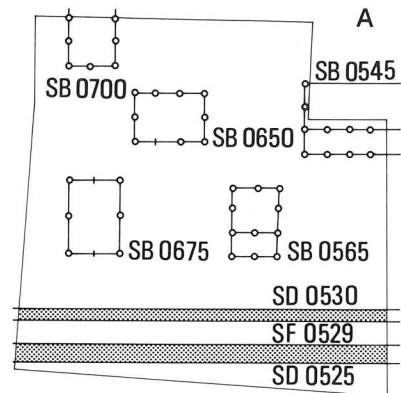


fig. 15 時期変遷図 (I)

C 期（奈良時代後半） 坪内を二分する東西小路
S F 0529は廃絶し、少なくとも十六坪西半は一
体として利用されたと考えられる。

この時期は井戸 S E 0600を中心に、それを囲
むように配置される建物群から構成されている。
いずれも小規模な建物であることから、敷地利
用は前期と同様に付属施設が建つ区画であった。
C₁、C₂の2時期に細分できる。

C₁期は、調査地中央の井戸 S E 0600 Aの周囲
に S B 0539をはじめ、総柱の建物 S B 0610など
全体的に建物が建ち、建ぺい率も高くなってい
る。S B 0522は極めて規模が小さく、仮設的。

C₂期は、調査区南半に建物が集中し、敷地利
用に若干変化がみられる。しかし、井戸 S E 06
00 BはC₁期の井戸 S E 0600 Aの改作であり、S
B 0521及び S B 0640は、それぞれ S B 0539、S
B 0610の建て替えと考えられるので、全体とし
ては変わらない。建物の一部に側柱筋を合わせ
るなど配置上に配慮がみられる。なお、調査地
北辺や西辺には多くの土壌が掘られた。

D 期（奈良時代末期） 敷地はC期のものが踏襲
されたが、井戸 S E 0600 Bは廃絶している。

南北棟建物を主に4棟の建物が調査区全体に
わたって建ち並ぶ。建物の規模は桁行3間、梁
行2間が主で、柱間も6～7尺と狭い。奈良時
代末期に属する出土遺物が極めて少ないことか
ら、この地区の性格は、B、C期とかなり異な
ると思われる。しかし、坪の西方であり、しか
も規模の大きな建物は存在しないので、前期同
様に付属的施設が建つ区画と考えられる。

平安時代以降 この地区は、平安時代以降も一時宅

地として利用されたいが、判明した主要遺構は、S B 0550、S B 0672、S B 0680の
ほかにはなく、利用密度は極めて低い。また、この時期の出土遺物もほとんどないので
平城京廃絶とともに宅地として利用されなくなったものと考えられる。それ以降は、若
干の南北斜行溝や土壌群が存在するにすぎない。

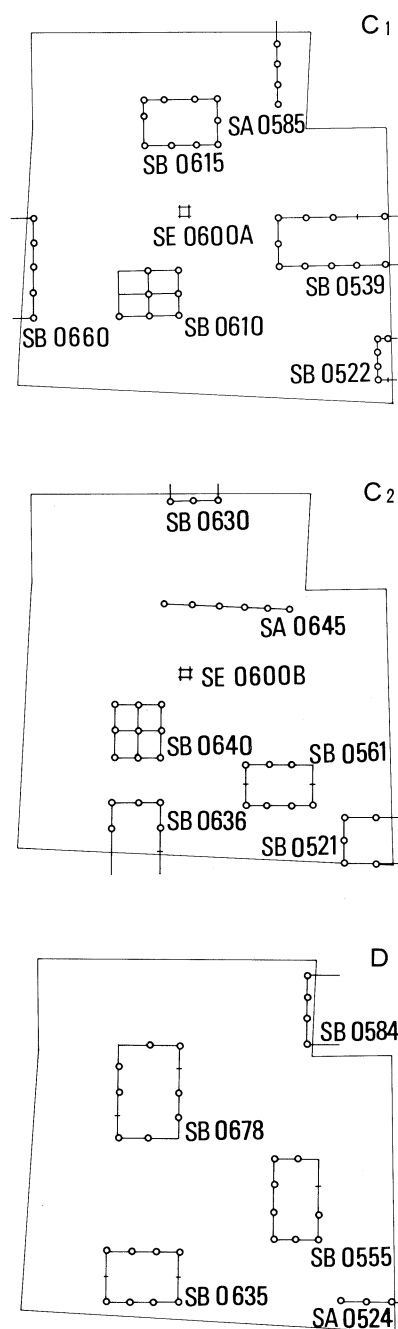


fig. 16 時期変遷図（II）